城西国際大学紀要　第31巻　第２号　2023年３月　145-158

〈研究・調査報告〉

大学１年生を対象としたオンライン英語授業の実態調査
―大学２・３・４年生との比較を分析―

渡　邉　治　郎

【要旨】

近年、多くの大学ではオンライン授業を推進し、オンライン授業のメリットとデメリットが明らかになってきた。今後は、オンライン授業の継続性やそれに伴う質の向上がますます求められると感じる。本研究では、大学1年生を対象にしたオンライン英語授業の学習効果と問題点に関する実態調査を行い、大学2・3・4年生に行われたオンライン授業の実態調査（渡邉2022）との結果を比較した。これらの調査結果から考察を進め、オンライン英語授業の有効性と改善策を示すことを目的とした。結論としては、「オンライン英語授業実施率」、「学習効果」、「問題点」の3項目とも、1年生の回答は2・3・4年生の回答と同様の傾向が見られ、オンライン授業に対しては全体的に肯定的な意見が多いことが明確になった。特筆すべきは、英語のスキルアップに関して「語彙力」が伸びたと強く感じる1年生が、2・3・4年生の4倍近い結果が示された。このことから、今後は授業内で語彙力をアップする内容を取り入れることがより効果的だ。

キーワード：オンライン授業、同時双方向型、ハイブリッド、メリットとデメリット
語彙力、英語スキルアップ

１．目的と研究背景

2020年初頭に世界的なパンデミックを引き起こしたCoronavirus Disease 2019（COVID-19）により、日本国内の多くの大学ではオンライン授業の実施を余儀なくされた。オンラインという異なる授業形態の中で、対面授業に劣らない授業内容を提供することへの要望がますます高まってきていると感じる。この動向から、今後はオンライン授業の学習効果を大学生の実際の意見を考慮し、今後の授業カリキュラムに取り入れた英語教育がますます求められると予測される。大学2・3・4年生を対象とした調査では、オンライン英語授業のメリットとデメリットが報告されている（渡邉 2022）。メリットとしては、通学時間が無く、自宅で自分のペースで受講でき、課題の提出や資料入手が楽になった点が挙げられている。デメリットとしては、インターネット環境の不具合、課題の量が多いことやコミュニケーション不足が報告されている。

そこで本稿の目的は、1年目からオンライン授業だった1年生に着目し、すでに対面授業を経験した2・3・4年生との「オンライン英語授業の学習効果と問題点」（渡邉 2022）の違いを比較する。1年生の調査結果を踏まえ、1年生から4年生全体の回答を考察し、今後の可能性と展望を含め将来のオンライン英語授業の対応策に役立てたい。

２．先行研究

近年、大学ではオンライン授業の普及により、講義の質を向上させるため、オンライン授業のメリットとデメリットについて言及している論文は多数見られる。その中でも、情報通信技術を活用したさまざまな研究が報告されている。

Ekmekci（2015）によると、情報通信技術の進化により遠隔教育の幅が広がり、学生の満足感が向上したと述べている。トルコの大学で遠隔による英語授業を受講した学生の大半が授業の内容、構成、リーディング、文法については満足したと回答している。その反面、リスニング、スピーキング、ライティングに関しては、学生の大半が満足に値しないと回答したと述べている。

Nurieva & Garaeva（2020）は、教員と学生の双方の意見について述べている。学生が回答したメリットとして、対面より出席率が上がった、画像や音声の質が良い、インストールが簡単だなどが挙げられた。その反面、疲れやすい、マイクが機能しないというデメリットも報告している。教員が感じるメリットとしては、画面を学生と共有できること、自分の背景を変えられる、チャットや挙手機能があること、ブレイクアウトルームが使用できることなどが挙げられた。デメリットとしては、学生の剽窃をチェックできないこと、授業中の教員に対する返答や質問が少ない、クラスの準備や課題をチェックするのに対面より時間がかかる、学生がイニシアティブを取ることに前向きでないため学生同士の活動や学習の動機づけが必要となることなどを挙げている。その上で、オンライン授業をより効果的なものにする要因として、生徒と教師のデジタル情報の活用能力、参加者全員の交流を確立すること、技術的な困難がないこと、適切な教育戦略、組織的な問題を挙げている。

東洋大学現代社会総合研究所ICT教育研究プロジェクト（2020）では、2020年度前期終わりに、全国15大学17学部の33講義からオンライン講義の実情や学習効果についてアンケート調査を行い、1426件の回答を回収した。その結果、オンライン講義の良い点として、「通学時間がかからない」、「自分のペースで学習できる」、「自宅で学習できる」、「教室移動がない」が全体の6割以上だった。最初の3項目は、渡邉（2022）によるオンライン英語授業の良い点と共通している。劣る点では、「自宅だと他の誘惑に負けそうで授業に集中できない」、「（ネットワークやデバイスの不具合で）音声や動画が途切れて聞き逃すことがある」、「教員ごとに使用するシステム（ZoomやWebex等）が異なるため、混乱しやすい」「対面よりも単調に感じてしまう」、「他の受講生徒とのディスカッションや交流が少ない」などの回答が多かった。オンラ

イン講義の評価を自由記述から回答を確認すると、ポジティブ37％、ネガティブ28％、ニュートラル35％と肯定的な意見が多かった。学習効果を学年別に見てみると、効果が上がった講義が「多くある」「やや多くある」と回答した学生は、2年生33％、3年生40％、4年生51％と学年が上がるにつれて効果も上昇している。次に、学習効果を授業の規模で調査したところ、効果が上がった講義が「多くある」「やや多くある」の合計が、50人以下のクラス31％、100人以下のクラス34％、101人以上のクラス45％と、クラスの人数が多くなるにつれて評価が上がっている。

岡田（2021）は、オンライン授業のメリットとして、移動時間がないこと、自分のペースで受講できること、先生に質問しやすいことを挙げている。デメリットとしては、授業に集中できないこと、オンライン環境に対する不安、人との交流不足、授業への意欲の低下、課題の多さなどを報告している。

鈴木（2021）の研究では、同時双方向型とオンディマンド型の両方からオンライン授業を考察した。オンディマンド型では動画を倍速で視聴後、十分に視聴しないで課題を回答する学生がいたことや、受講しているのかの確認が取れないと述べている。同時双方向型の場合は、顔や音声のデジタル加工により学生が実際に授業を受けているのか確認するのが難しい点や、その場にいたとしても授業と関係ないことをしていてもわからない点を挙げている。その上で、オンライン授業は対面授業と代替ができないものであると論じている。もしオンライン授業を普及させるのであれば、それに伴って単位、出席、試験、在学期間、学費のような従来の根本的な学校システムの変更を余儀なくされるだろうと述べている。

高原、宮里（2021）は、オンディマンド型講義について調査を行った。メリットとして多かった意見は、決められた講義時間に受講する必要がないことから、時間を自由に使えて効率的であることや、講義を繰り返し視聴できるので復習しやすいという点である。デメリットについては、時間が自由な分だらけてしまった、動画を見続けるのが難しいなどのモチベーションの欠落についての回答が多く見られたようだ。その他、対面では教師への気軽な質問が可能だが、オンディマンド型講義ではそれができないため、質問がしにくかったと回答した学生も多く見られ、ストレスを感じている様子もあったようだ。

３．調査内容

本調査では、主に3つの項目である、「調査対象者」、「調査方法」、「データ分析」から説明する。表1では、アンケート調査の質問項目をまとめた。

３．１　調査対象者

調査対象者として、城西国際大学1年生49名にアンケートを要望した。参加者は2020年に英語スピーキングクラス「Oral Fluency Ⅰ」を受講した学部生である。

３．２　調査方法

本調査は、2020年「Oral Fluency Ⅰ」を受講した1年生の授業最終日にあたる15回目に任意で行った。今回のオンライン授業では、Cisco Webex Meetingsを使用。Web会議システムにより同時双方型授業を行った。学生には、最終日に学内ポータルサイトManabaにマイクロソフトWordファイルで掲示したアンケートを回答後、メールに添付して返信してもらった。参加者には、事前に内容説明をして、「アンケート調査同意書」に署名した上で調査に参加してもらった。11の質問項目には、大学2・3・4年生と回答を比較するため、渡邉（2022）と同様の質問を採用した（表1）。質問項目1、2、9、10、11には5段階評価、質問項目3、4、5は3段階評価と自由記述、質問項目6、7、8には自由記述を使用した。回答は全て、2021年1月25日から2月11日の間に受け取った。

表1．オンライン英語授業におけるアンケート調査の質問項目

1	感染症リスクがある場合、オンライン英語授業の実施割合はどのくらいが適切だと思いますか？					
2	感染症リスクがなくなった場合、オンライン英語授業の実施割合はどのくらいが適切だと思いますか？					
3	オンライン英語授業は、対面英語授業と比べて学習効果はありましたか？					
4	オンライン英語授業には、満足していますか？					
5	オンライン英語授業は、対面英語授業と比べて身体的、精神的負担に変化はありましたか？					
6	オンライン英語授業を受ける上で、困難と感じた点はどのようなことですか？どのように困難を乗り越えますか？					
7	オンライン英語授業を続けられる理由はどんな点にありますか？					
8	オンライン英語授業の良い点と改善点を述べて下さい。					
9	オンラインで英語を学習することで、孤立感、不安、相談相手がいないと感じたことはありますか？					
10	オンライン授業でわからないことがあるとき、あなたはどうしますか？					
11	各項目から、最も当てはまるものを一つ選んでください。					
		まったくそう思わない	ややそう思わない	どちらともいえない	やや そう思う	強く そう思う
オンライン授業により、英語を話す力が伸びた。						
オンライン授業により、英語を聞く力が伸びた。						
オンライン授業により、英語の文法力が伸びた。						
オンライン授業により、英語の語彙（単語の数）が増えた。						
オンライン授業により、英語の発音が良くなった。						

（出典　渡邉（2022））

３．３　データ分析

分析方法として、まず全回答をMS Wordファイル上にインプットして内容を確認した後、質問項目 1、2、3、4、5、9、10、11 では、3、5 段階評価の回答を整理し、統計をまとめた。質問項目 6、7、8 では、自由記述を渡邉（2022）と同様にコーディングシステムを使用、以下の 4 レベル（データ準備、データ分析、コーディングシステムの構築、パターン分析）から分析結果を抽出して統計を出した。

A. データ準備

最初の段階では、Q6、7、8 の全自由記述回答を抽出して質問順にMS Wordファイル上に整理した。その次に、記述式回答を抽出して、各質問別に整理した。

B. データ分析

初期段階の分析では、全回答の内容を詳しく読み、どのような共通点があるかを把握した。このプロセスでは、キーワードとなる言葉や意味を探し出し、共通点がある回答別に整理することで、暫定的なコーディングシステムを作成することが目的である。

C. コーディングシステムの構築

この段階では、データ分析で作成した暫定的なコーディングシステムを使用して、再度回答内容を一つ一つ確認し、共通点をより明確にした。このプロセスを繰り返し、回答を選別すことで、分析に使用するコーディングシステムを作成した。

D. パターン分析

最終段階では、作成されたコーディングシステムを使用して、回答内容のパターンを分析して、どのような傾向があるかを整理し、表にした（表 6、7、10）。

（出典　渡邉（2022））

４．結　果

本項では、アンケート調査の回答を、渡邉（2022）による 3 つの検討項目 A（オンライン授業を行う頻度はどの程度が望ましいか）、B（対面と比較したオンライン授業の学習効果）、C（学生がどのような問題点を感じているか）に分類して検討した。

４．１　分類Ａ

この節では、コロナによる感染症の影響がある中で、オンライン授業をどの程度実施するべきかについて質問項目 1、2 の回答を表 2、3 に示した。

表 2．Q1　感染症リスクがある場合、オンライン英語授業の実施割合はどのくらいが適切だと思いますか?

Q1	A. 0 %	B. 10 – 30%	C. 40 – 60%	D. 70 – 90%	E. 100%	無回答
回答数 ($N = 49$)	1	1	7	17	23	0

（出典　渡邉（2022）をもとに筆者作成）

質問項目 1 では、感染症リスクがある場合、どの程度オンライン授業を実施するべきかについての学生の回答を表 2 に示した。オンライン授業を実施する割合は100％だと回答した生徒は、23名で全体の約半数である47％である。オンライン授業の実施を70％から90％が適切だと回答した生徒は、17名で35％とこちらも多数の回答が確認された。

表 3．Q2　感染症リスクがなくなった場合、オンライン英語授業の実施割合はどのくらいが適切だと思いますか?

Q2	A. 0 %	B. 10 – 30%	C. 40 – 60%	D. 70 – 90%	E. 100%	無回答
回答数 ($N = 49$)	7	17	12	10	3	0

（出典　渡邉（2022）をもとに筆者作成）

質問項目 2 に関しては、感染症リスクがない場合どの程度オンライン授業を実施するべきかについての回答を表 3 にまとめた。10％から30％が適切だと回答した学生が17人で、全体の約35％である。全面的に対面クラスに戻すのが適切だと回答した学生は、7 人で約14％であった。このことから、感染リスクがなくなった場合でも、86％の学生は何らかの形でオンライン英語授業を行うことが適切だと考えていることが明確になった。

４．２　分類Ｂ

次に、オンライン授業の学習効果に関する質問項目 3、4、7、8、11を表にまとめた。

表 4．Q3　オンライン英語授業は、対面英語授業と比べて学習効果はありましたか？

Q3	A. 学習効果は上がった	B. 学習効果は下がった	C. 変わらない	無回答
回答数 ($N = 49$)	10	9	29	1

（出典　渡邉（2022）をもとに筆者作成）

質問項目 3 では、オンライン英語授業の学習効果についての回答数を示した。学習効果が上がったと回答した生徒は10人の約20％で、学習効果が下がったと答えた生徒数は 9 人の18％で、ほぼ同等の生徒数という結果が判明した。その中で最多数の生徒は、学習効果は変わらないと回答しており、全体の29人で約59％という結果になった。留意点として、大学 1 年生は入学当初から全ての授業がオンラインでのスタートしており、調査時点で大学対面授業が未経

験であったため高校の対面英語授業と比較して回答してもらった。

表 5．Q4　オンライン英語授業には、満足していますか？

Q4	A. 満足	B. 不満足	C. どちらでもない	無回答
回答数 ($N=49$)	27	2	2	18

（出典　渡邉（2022）をもとに筆者作成）

質問項目 4 では、オンライン英語授業に満足しているかについての意見を確認した。まず 3 段階評価を記入した後、自由記述による回答を依頼した。満足していると答えた生徒数は最多の 27 人で 55 %、不満足と回答した生徒が 2 人で 4 %、過半数がオンライン授業に満足していることがわかった。自由記述では、49 人中 39 人から意見を聞くことができた。

表 6．Q7　オンライン英語授業を続けられる理由はどんな点にありますか？

Q7	自宅で受講できる	通学時間がない	他生徒との会話	その他	無回答
回答数 ($N=49$)	13	7	4	23	2

（出典　渡邉（2022）をもとに筆者作成）

質問項目 7 では、オンライン英語授業を続けられる理由を表 6 に示した。回答方法として、自由記述による回答を依頼した。全ての記述解答をコーディングにより共通点を捻出すると、最も多かった共通キーワードとして、「自宅で受講できる」「通学時間がない」「他生徒との会話」が示された。「自宅で受講できる」に関しては、全体の学生 49 人中 13 人で約 27 %、「通学時間がない」では、7 人で約 14 %、「他生徒との会話」においては、4 人で 8 %の回答が確認できた。

表 7．Q8　オンライン英語授業の良い点と改善点を述べて下さい

Q8 良い点	自宅で授業が受けられる	ペア、グループワーク	通学時間がない	課題提出、資料入手	その他	無回答
回答数 ($N=49$)	18	8	4	3	13	2
改善点	インターネット環境	生徒や先生との会話	改善点なし		その他	無回答
回答数 ($N=49$)	25	7	4		11	2

（出典　渡邉（2022）をもとに筆者作成）

質問項目 8 では、オンライン英語授業の良い点と改善点を表 7 に示した。自由記述による回答を、全てコーディングにより共通点を捻出した。まずは、「良い点」に関する回答を最も多かった共通点から順に示してみると、「自宅で授業が受けられる」「ペア、グループワーク」、

「通学時間がない」、「課題提出、資料入手」に分類することができた。各回答項目の回答率を確認すると、「自宅で授業が受けられる」が18人で全体の約37％、「ペア、グループワーク」が8人で約16％、「通学時間がない」が4人で約8％、「課題提出、資料入手」が3人で約6％であった。「自宅で授業が受けられる」「生徒と会話ができる」の合計が約53％で過半数を占めることがわかった。

次に「改善点」の回答を多かった共通点から順に表すと、「インターネット環境」「生徒や先生との会話」に分類できた。回答率では、「インターネット環境」が26人で約53％と、圧倒的に回答が多かった。回答を確認してみると、基本的なネットワーク環境は生徒によって違うが、多くの生徒がネットワークの不具合によって授業に支障をきたしていたことが明確になった。さらに、ブレイクアウトルームを使用してペアワークやグループワークを頻繁に行なったため、ネットワーク環境の悪い生徒とペアになると、ワーク自体ができなくなってしまうケースも見受けられた。「生徒や先生との会話」に関する回答率は6人で約12％であった。回答例を見ると、わからないことを気軽に聞けないことが生徒の不満に繋がっていることが確認できた。

表8．Q11　各項目から、最も当てはまるものを一つ選んでください。
オンライン授業により、英語を（話す力、聞く力、文法力、語彙力、発音力）が伸びた。

Q11　回答数（$N=49$）	まったくそう思わない	ややそう思わない	どちらともいえない	ややそう思う	強くそう思う	無回答
話す力	0	8	15	23	2	1
聞く力	0	8	7	26	7	1
文法力	1	7	23	16	1	1
語彙力	1	10	8	18	11	1
発音力	2	2	24	14	6	1

（出典　渡邉（2022）をもとに筆者作成）

質問項目11では、オンライン英語により伸びたと感じる英語力を表8にまとめた。英語力が伸びたと回答した2項目「ややそう思う」、「強くそう思う」の回答を合算した結果、最多数が「聞く力」が伸びたと回答した学生で33人、全体の約67％である。この結果は、大学2、3、4年生を対象とした結果（渡邉2021）と同様であることが明らかになった。その次に多い回答が、「語彙力」が伸びたと回答した学生で29人、約59％である。「語彙力」に関しては、「強くそう思う」と回答した学生数が最多の11人、約22％だった。その反面、伸びていないと感じる「ややそう思わない」と回答した学生数も最多数の10人、約20％だった。3番目に多かった回答が、「話す力」が伸びたと回答した25人、約51％となる。「発音力」では、20人の約41％が伸びたと回答している。「文法力」に関しては、17人35％が伸びたと回答したが、この項目では最も少ない数だった。ただこの文法力が伸びたと回答した数に関しても、伸びたと思わないと回答した8人16％よりも倍以上の数値となり、過半数は文法力が伸びたと感じている結果となる。

４．３　分類Ｃ

ここでは、「オンライン授業の問題点」に関するQ5、Q6、Q9、Q10の質問の数値をまとめた（表9、10、11、12）。

表9．Q5　オンライン英語授業は、対面英語授業と比べて身体的、精神的負担に変化はありましたか?

Q5	A. 負担が増えた	B. 負担が減った	C. 変わらない	無回答
回答数 ($N=49$)	5	20	24	0

（出典　渡邉（2022）をもとに筆者作成）

質問項目5では、オンライン英語授業は、対面英語授業と比べて身体的、精神的負担に変化はあったかの回答を表9に示した。回答方法として、3段階評価を記入後、回答理由を自由記述してもらった。3段階評価では、オンライン英語授業により「負担が増えた」と感じる学生は、49人中5人で約10％であった。「負担が減った」と回答した生徒が20人で約41％、「変わらない」と答えた生徒が24人と最も多く、約49％であった。「負担が減った」「変わらない」と回答した生徒の合計が44人で、約90％に達することから、大多数の生徒はオンライン英語授業により身体的、精神的負担が増えていないことが示された。この理由を49人中34人から受け取った自由記述を確認すると、身体的負担に関しては、通学時間が無くなったことで負担が減ったことを理由に挙げる意見が多数あった。精神的負担においては、人と接することが無い分リラックスすることができ負担が減った内容の回答した生徒が多かったことが示された。

表10．Q6　オンライン英語授業を受ける上で、困難と感じた点はどのようなことですか？どのように困難を乗り越えますか？

Q6	インターネット環境	生徒や先生とのコミュニケーション	特になし	その他	無回答
回答数 ($N=49$)	16	7	4	9	2

（出典　渡邉（2022）をもとに筆者作成）

質問項目6では、記述式回答内容をコーディングシステムにより共通するキーワードを探し出し、オンライン英語授業で困難と感じた点の回答を表10に示した。回答として最も多かったのが、「インターネット環境」で全体の16人約33％。2番目に多かったのが、「生徒や先生とのコミュニケーション」で全体の15人約31％の回答があった。この2点においては、大学2、3、4年生を対象にした調査結果と同様の結果が示された（渡邉 2022）。困難を乗り越える方法としては、インターネット環境を少しでも良くしようと、生徒自身が工夫をして積極的に解決方法を探し出そうとしている姿勢が窺える。「生徒や先生とのコミュニケーション」に対する困難を乗り越える方法では、オンライン上で皆の前で話しかけることに困難を感じつつ

も、勇気を出して声を出していこうという前向きな姿勢が窺える。ペアワークやグループワークを頻繁に行なった点でも、少人数や2人ならクラス全体の中で声を出すより生徒や先生に話しかけやすい環境にあったことも推測できる。

表11．Q9　オンラインで英語を学習することで、孤立感、不安、相談相手がいないと感じたことはありますか?

Q9	A. そう思う	B. ややそう思う	C. どちらでもない	D. あまりそう思わない	E. そう思わない	無回答
回答数（$N=49$）	7	10	8	14	7	3

（出典　渡邉（2022）をもとに筆者作成）

質問項目9では、オンライン英語授業を学習することで、孤立感、不安、相談相手がいないと感じたことはあるかの回答を表11に示した。回答方法として、5段階評価を選択後、評価理由を自由記述してもらった。回答で最も多かったのが、「あまりそう思わない」で、全体の約29％にあたる14名であった。「そう思わない」を選択した生徒7名、約14％と合算すると、孤立感、不安、相談相手がいないと特に感じていない生徒が全体の半数近い約43％となる。これらの生徒の回答理由を自由記述で確認すると、知り合いや相談相手がいることにより、孤立や不安を感じることがないケースや、もともと一人を好む生徒にもあまり影響がなかったことが示された。「ややそう思う」に関しては2番目に多い10名で約20％、「そう思う」が7名で約14％となり、孤立感、不安、相談相手がいないと感じている生徒は全体の約35％であった。自由記述でこれら生徒の理由を確認すると、1年生からオンラインが始まったため、実際にまだ誰とも直接会っていないことでなかなか生徒同士の交流ができなかったために孤立感、不安、相談相手がいないと感じる生徒がいることが明確になった。

表12．Q10　オンライン授業でわからないことがあるとき、あなたはどうしますか？

Q10	A. 先生に質問する	B. 身近な人に質問する	C. 放置する	D. わかるのを待つ	E. 自分で解決する	無回答
回答数（$N=53$）	10	24	0	1	16	2

（出典　渡邉（2022）をもとに筆者作成）

質問項目10では、オンライン英語授業でわからないことがあるときにどうするかの回答を表12に示した。4名の学生が2回答したため、回答数（$N=53$）になる。回答方法には5段階評価を選択後、評価理由の自由記述を行なった。回答率をみると、最多が「身近な人に質問する」で全体の24名で約45％であった。その次に多かった回答が、「自分で解決する」で16名約30％である。「先生に質問する」に関しては10名の約19％で、理由としては、わからないことに対する答えの正確性と確実性を求めた回答が見られた。

５．考　察

本章では、本研究が行った大学１年生を対象にしたオンライン英語授業のアンケート調査結果を、大学２・３・４年生を対象にしたオンライン英語授業の調査結果（渡邉 2022）と比較した。比較項目としては、渡邉（2022）により明確になった３項目、「オンライン英語授業実施率」、「学習効果」、「問題点」を比較した。

まず「オンライン英語授業実施率」に関して比較してみる。大学２・３・４年生では、オンライン英語授業を実施することが適切だと回答した学生が約99％であり、全体的に学生の理解を得ており、COVID-19収束後も74％の学生がオンライン授業を続けることを望んでいる結果が明らかになった（渡邉2022）。大学１年生でも同様に、学生の約98％がオンラインでの授業実施を望んでおり、COVID-19収束後も大半の86％の学生が何らかの形でオンライン授業の継続を望んでいることが本研究で明確になった。大学１年生と２・３・４年生で同様の結果が見られた理由としては、両者が共通してCOVID-19感染に対する恐怖心があることと、オンラインの利点である自宅で気軽に受講できることが共通の認識であると推測される。

次に「学習効果」について比較する。大学２・３・４年生では、オンライン英語授業でも79％が対面授業と同等かそれ以上の学習効果があることが明確になった（渡邉 2022）。大学１年生でも約80％と、ほぼ同等で非常に高い回答率であった。大学１年生は、調査時点で大学対面授業が未経験であったため、対面とは比較できないことが理由という回答も見受けられた。しかし、カメラオンにしてお互いの顔を見ながら会話ができることや、ブレイクアウトセッションにより毎回違う生徒とペア・グループワークができることで、オンラインでも満足度が高いという内容の回答が複数確認できた。このことから、学習効果があるとの回答につながったと推測する。この点でも大学２・３・４年生の調査結果（渡邉 2022）と一致する。

「問題点」に関しては、大学２・３・４年生では「インターネット環境」が全体の約29％、「生徒や先生とのコミュニケーション」が全体の約26％と指摘する回答が多く見られた（渡邉 2022）。大学１年生でも同様に、「インターネット環境」が全体の約33％、「生徒や先生とのコミュニケーション」が全体の約31％という、この２項目の回答が最も多く確認できた。２項目とも１年生の回答が２・３・４年生よりも若干だが上回った理由としては、「インターネット環境」では１年生がまだパソコンやインターネット、Wi-Fi環境に不慣れな部分があることが考えられる。そのため１年生に対しては、入学時に学内ポータルサイトやLMS（Learning Management System）の使用方法など、ネット環境を丁寧にそして継続的に説明していくことが重要である。「生徒や先生とのコミュニケーション」の問題に関しては、１年生は調査時点でまだクラスメートと実際に会ったことがなかったため、生徒同士の信頼関係がまだしっかり構築されていなかったことで、オンラインではよりコミュニケーションが取りづらかったことが問題点に繋がったと推測される。生徒間や教師との繋がりをサポートする丁寧な取り組みが１年生に対しては特に重要だろう。

特記すべき事項として、オンライン授業でどのスキルが伸びたかを確認した質問項目11だ。「語彙力」が伸びたことを「強くそう思う」と回答した2・3・4年生が約5％だったのに対し、1年生では22％と大きく増加していた。記述回答から、オンラインで周りに気遣うことなく自分のペースで学習できるため、分からないことをすぐに自分で調べられることが「語彙力」にプラスに働いたと推測される。その反面、「語彙力」に関しては、「ややそう思わない」、「全くそう思わない」の合計数が全体の約22％で最も多かったことから、伸びたと感じる学生とそうでない生徒に分かれる結果となったことも明らかになった。この点は、担当教師もぜひボキャブラリーを増やすチャンスとして捉え、率先して授業内で工夫することが重要だと考える。

６．結論と今後の課題

本稿では、日本の私立大学1年生を対象としたオンライン英語授業の実態調査をまとめた。日本の私立大学2・3・4年生を対象にしたオンライン英語授業の調査結果（渡邉 2022）により明らかになった「オンライン英語授業実施率」、「学習効果」、「問題点」では、3項目とも同様の結果が見られ、これらを支持する内容となった。全体的には、オンライン英語授業に学生は満足している回答が明らかになった。特筆事項としては、「語彙力」が伸びたことを「強くそう思う」と回答した1年生が、2・3・4年生の4倍以上だったことだ。今後のオンライン英語授業では、語彙力アップを意識した内容を盛り込むと効果的だと考える。

今後の課題としては、本稿の対象となる学生数に関しては、49名と限られていたため、今後はさらに人数を増やし、生徒の英語力や授業レベルの属性を明確にして調査することが望ましいと考える。さらには、5段階評価の質問項目全体を通して、「どちらでもない」を選択する学生が多かったことから、今後は曖昧な回答を防ぐために4段階評価（そう思う、ややそう思う、ややそう思わない、そう思わない）に絞ることが適切だと考える。本研究の試みが、今後のオンライン授業のさらなる発展に役立つことを期待する。

【参考文献】

Ekmekci E. (2015). Distance-education in foreign language teaching: evaluations from the perspectives of freshman students. Procedia – *Social and Behavioral Sciences*, 176, 390-397.

Nurieva, G. & Garaeva, L. (2020). Zoom-based distance learning of English as a foreign language. *Journal of Research in Applied Linguistics,* 11, 439-448.

岡田佳子（2021）「学生から見たオンラオイン授業のメリットとデメリット―オンライン環境下のアクティブラーニングに焦点を当てて―」『長崎大学教育開発推進機構紀要』11：25-41.

鈴木円（2021）「オンライン授業と大学のこれから―破壊的イノベーションから脱学校へ―」『昭和女子大学現代教育研究所紀要』6：45-55.

高原利幸・宮里心一（2021）「オンライン講義と対面講義における学生の意識比較」『工学教育研究KIT progress』29：51-57.

渡邉治郎（2022）「オンライン英語授業における学習効果と問題点の実態調査と分析―スピーキングクラスを受講する大学生2、3、4年生を対象に―」『城西国際大学紀要』30（2）：67-84.

ウェブ検索：

東洋大学現代社会総合研究所ICT教育研究プロジェクト（2020）「コロナ禍対応のオンライン講義に関する学生意識調査」https://www.toyo.ac.jp/-/media/Images/Toyo/research/labo-center/gensha/research/52395/1questionnaire.ashx?la=ja-JP&hash=C36CFE9B7AD656C60987AAB3BE92B314052C9E19（2022年8月17日閲覧）

A Questionnaire Survey of Online English Classes for First-Year University Students:
In Comparisons to the Analysis of Second, Third, and Fourth-year Students

Jiro Watanabe

Abstract

The promotion of online classes at many universities due to the Coronavirus Disease 2019 (COVID-19) that began in early 2020 has revealed the advantages and disadvantages of online classes. There is an increasing need to improve the continuity of online classes and the quality associated with them in the future. The present research has surveyed the learning effectiveness and problems of online English classes for first-year university students and compared the results with a survey of online classes conducted for second-, third-, and fourth-year university students (Watanabe 2022). In conclusion, regarding "Rate of implementation of online English classes," "Learning effectiveness," and "Problems," the first-year students' responses were similar to the second-, third-, and fourth-year students' responses. Overall, many respondents had positive opinions about online classes. Regarding improved English skills, many first-year students strongly felt that "vocabulary" had increased, nearly four times as many as second-, third-, and fourth-year students. The purpose of this paper is to discuss the learning effectiveness and problems of online English classes, based on the results of a survey of first, second, third, and fourth-year university students, and to show the effectiveness of online English classes and how they can be utilized.

Keywords: online English class, synchronous online course, hybrid online courses, advantages and disadvantages, vocabulary